



収容所から来た遺書

ラゲリ

henmi jun

辺見じゅん

ラーゲリ

henmi jun

文藝春秋

辺見じゅん（へんみ・じゅん）

富山県に生まれる。早稲田大学文学部卒業。

現在、作家・歌人として活躍中。

主な著書に「呪われたシルク・ロード」「ふるさと幻視行」「男たちの大和」（第3回新田次郎賞受賞）「昭和の遺書」「はじめて語ること（対談集）」（文藝春秋刊）「闇の祝祭（歌集）」（第12回現代短歌女流賞受賞）など。

ラードリ
収容所から来た遺書

1989年6月25日 第1刷

1989年10月5日 第4刷

著者 辺見じゅん

装幀者 菊地信義

発行者 豊田健次

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3-23（〒102）

電話（03）265-1211

印刷所 凸版印刷株式会社

製本所 中島製本株式会社

*定価はカバーに表示してあります

© Jun Henmi 1989

Printed in Japan
ISBN4-16-343270-1

目次

プロローグ

7

一章

ウラルの日本人俘虜

17

二章

赤い寒波

マロース

41

三章

アムール句会

73

四章

祖国からの便り

127

五章

シベリアの「海鳴り」

175

エピローグ

257

あとがき——三十三年目に届いた遺書

265

地図 高野橋 康

収容所<sup>ラ
ー
ゲ
リ</sup>から来た遺書

プロローグ

シベリアの九月は、すでに冬の始まりを告げている。数日前には初雪が降った。

一九四八（昭和二十三）年九月下旬。ソ連のウラル山中の街、スベルドロフスクの駅を発った十数輛編成の有蓋貨車はシベリア鉄道を一路、東へと向かつて走っていた。スベルドロフスクの収容所^{ラゲリ}で二年半近く俘虜生活を送った五百名の日本人たちを満載した帰還列車^{グモイ}である。

一九四五（昭和二十）年八月の敗戦でソ連兵に捕われ、翌年に満州からスベルドロフスクの収容所に護送されたときと同じすし詰め^{スシメ}の貨車の移動だが、男たちは顔に疲労の色をにじませているものの、いちように明るい。外気に素肌をさらしたとたん凍傷にやられる零下四十度の厳冬から解放されると思うだけで、なにものにもかえがたい喜びであった。

列車は食糧の積み込みや給水のために、一日に一度は停車した。停まると、男たちは貨車からとび降りて、思いきり外の空気を吸い、足腰を伸ばすことができる。二年半前に護送されたとき

のようなソ連兵による威嚇のための発砲もなかった。

「おーっ、湖だ。湖が見えたぞ！」

「バイカル湖だ！」

という声がとつぜん車内にあがった。その声に、上段の棚でうつらうつらしていた松野輝彦は目を覚ました。松野と同じ側に坐った男たちが、明かりとりの小窓にとりすがって顔を押しあてている。

松野も割りこんで小窓をのぞいた。

重く垂れこめた鉛色の空と溶け合うように、凍りついた湖面がどこまでも広がっている。

「山本さん、バイカル湖に間違いないですよね」

松野は、隣で膝を抱えて目を閉じている山本やまもと幡男の肩をゆすった。

山本が目を開けた。禿げかかった頭と白毛のまじった伸び放題の口髭、耳には絆創膏と電線でんせんで不細工に補強したぶ厚いまん丸な眼鏡の蔓つるがかかっている。山本はゆっくり膝をずらすと、小窓に顔を寄せた。

「もうそろそろとは思っていたんだが……バイカル湖だな」

山本が外をのぞいて呟いた。

「広いですね……バイカルってのは。あのときは、翌朝に目を覚ましても、まだバイカル湖がつ

づいていたのにはたまげましたよ」

松野は初めてバイカル湖を見たときのことを思い出した。

敗戦から八ヵ月後、ちょうど二年半前の一九四六（昭和二十一年）四月半ば頃である。

ソ連軍の命令で編成された日本人俘虜の第四三五作業大隊一千名は、内山吉太郎少佐を梯団長として満州の牡丹江俘虜収容所から、すし詰めの護送貨車に乗せられた。山本と松野もその一行のなかにいた。

作業大隊という名称がつけられたのは、帰還港のナホトカまでの移動の途中、戦争で破壊された橋梁や道路などを修復していくためだ、とソ連側から説明されていた。

車内は、木の棚で上下二段に仕切られ、あぐらをかいたり膝をかかえて屈んでいるだけで、身動きもままならない混み具合이었다。将校や下士官兵にまじって民間人も詰め込まれていた。だれもが俘虜になったときのままの汚れた服で、たえずシラミの襲撃に悩まされた。

車輦は震動が激しく、小窓が閉じられると昼でもうす暗い。床の小さな穴が便所代りの流し場になっていたが、衰弱しきって垂れ流し状態の者もいたので、車内には排泄物の臭気が充満した。そんな家畜輸送車さながらの密室のなかで、なんんか息を引きとった。

それでも祖国へ帰れるという安堵感からか、急に方言まじりで話した者もいた。

出発してから十日余も経った夕方のことだ。

「海だ、海が見えたぞ！」

「日本海じゃないか」

と、窓際の男たちが口々に叫んだ。日本海が見えたら祖国はもう目と鼻の先だ。ところが、その「海」が日本海どころか湖で、ナホトカとは反対にはるか西方にへだたったバイカル湖だともなく分ると、車内には急速に重たい空気がたちこめたものだ。

——あれから二年半が経った。そしてふたたびバイカル湖を見ながら、こんどは確かに日本の方に向かって列車は進んでいる。

松野は懐かしさも入りまじった複雑な気分にひたった。

「バイカル湖までくれば、こんどこそ本物のダモイ（帰国）だよ」

外をのぞいていた山本が声をかけた。

「大丈夫ですかね、ほんとうに」

松野は周囲を気にして声をひそめた。

山本は小窓から顔をはなし、眼鏡の奥の人なつこそうな目を細めると、

「大丈夫だよ」

いかにも確信あり気に断定した。

スベルドロフスクの収容所を出発する少し前から、松野の耳にはさまざまな噂が入っていた。終点のナホトカには検閲所があり、そこでの人民裁判で最終的に日本へ帰すか否かの思想審査が行なわれる。不適格と判断されると、ふたたびシベリア奥地の収容所へ送り返されると囁かれて

いた。日本ではなく、ソ連を祖国と思っているかどうかを俘虜の態度から判定するという話もあったし、帰国の可否の判断を下すのはソ連側に信頼されている一部の日本人たちだ、という噂も流れていた。

山本はロシア語に堪能で、スベルドロフスクの収容所からずっと通訳をしている。その山本から確信にみちた言葉を聞かされたが、松野はなぜか不安な気持を打ち消せなかった。

松野が山本に初めて会ったのは、一九四五（昭和二十）年十一月末の牡丹江俘虜収容所である。その三カ月前の八月九日払暁、ソ満国境から百五十万のソ連軍が侵攻してきた。対ソ戦を想定して満州に配備されていた関東軍は、すでに主要部隊を南方戦線に引き抜かれ、いちじるしく弱体化していた。戦闘は一方的に終り、六日後の八月十五日に日本は戦争に敗けた。武装を解除された日本軍の将兵と満蒙開拓青少年義勇軍や民間人を含む約六十万人が、八月十七日から翌年三月にかけて続々とソ連軍の俘虜になった。

一九四三（昭和十八）年に三十二歳で召集されて渡満した松野は、八月十七日に牡丹江の西方一〇キロの拉古付^{ラコフ}近で、第二二八師団歩兵二五八連隊の一等兵として武装解除を受けた。ソ連軍の捕虜となって、関東軍の旧陸軍兵舎を利用した牡丹江収容所に収容された。

そこで俘虜として通訳をさせられていたのが、山本幡男である。

しばらくして松野が山本と親しくなったのは、同じ召集の一等兵だったうえに、山本の著書を

読んでいたことも大きかった。

松野は、ソ連兵に命じられて満鉄官舎に備品の没収に行ったとき、たまたま本棚で見つけた一冊の本に興味をもった。『北東アジアの諸民族』という書名の小型の薄い本で、ソ連を知るのに役立つと思い、ソ連兵の目をかすめて持ち帰って読んでみた。研究書らしく難しかったが、シベリアにおける少数民族について詳しく触れられていた。ソ連領にはおびただしい数の少数民族がいると書かれてあったのが印象に残った。奥付には、昭和十六年八月に中央公論社から発行、満鉄弘報課編とあり、著者名に山本幡男と記されていた。

飄々とした風貌の山本通訳がその本の著者だと知ったとき、「満鉄の調査部において、あの本を書いた人だったのか」と意外に思った。「あなたの本を読んだことがある」と話すと、山本は、「いや、弱りましたな」と、禿げかかった頭をかいてしきりに照れたものだ。

貨車は停まったり動いたりをくり返し、ゆっくり行くかと思うと、急にスピードをあげて突走った。スピードがあがると、車輛の揺れは一段と激しくなる。

車内の食事は黒パンだけだが、厳しいノルマを課せられる作業がないだけ収容所よりもずっと楽だ。とりわけ停車時には降りて用便がたせるのが嬉しかった。

「そろそろヤブロノボ山脈に入るころだよ」とか「三分の二はきたな」などと、山本はときどき松野に現在地を教えてくれる。山本はロシア語だけでなく、ソ連の地理にも詳しい。

貨車の小窓からの風景が大きく変った。白樺や樅もみぎが鬱蒼と茂った森林地帯を縫って列車は走りつづけた。

「もうすぐハバロフスクだよ」

山本が松野の耳もとで囁いたのは、出発してから二十日近く経ったところである。ハバロフスクまで行けば、帰還船が待つナホトカ港まで一昼夜ほどの距離だ、と山本がつけ加えた。松野の心もしいにはずんだ。

貨車が急停車したのは、それから間もなくである。窓の外は夕暮れになっていた。

「どうしたんですかね」

松野が山本に話しかけたとき、貨車の鉄扉が引かれ、外の冷えきった空気が侵入してきた。肩章をつけたソ連軍将校が数人の兵士たちを従えて乗り込んできた。一行のなかに小柄な日本人がひとりまじっている。

将校は車内を見回すと、ロシア語で「通訳はどこにいる」と怒鳴った。

山本が棚から下りて通路に立った。

将校は山本の前までくると、書類を突きだし、ロシア語でまくしたてた。二年半のスベルドロフスクでの収容所生活で片言程度のロシア語は理解できるようになっていた松野は、「呼ばれた者は装具を持って下車しろ」といつているらしいのが分った。

車内はざわめいたが、将校のひやりとした視線ですぐに静まった。みんなは固唾かたずを呑んで山本

の口元を見つめた。

山本は渡された書類に書かれている名前を読み始めた。最初に読みあげたのは内山少佐の名だった。つづいて十数名の名前を次々に読みあげていった山本の声が、ふいに詰まった。

「ぼく……」

と呟いたまま押し黙った。それから気を取り直したように、「山本幡男」とはっきりした声で自分の名前をいい、残りのなん名かの名を読みあげた。

車内はしんと静まり返った。顔を伏せている者もいる。

あちこちで名前を呼ばれた男たちが重たい動作で腰をあげ、通路に立った。ソ連軍将校といっしょに乗り込んできた小柄な日本人はその間、一言も発しないまま冷やかな目で車内を見回していた。

そのとき、開け放しの扉近くにいた男たちのあいだから、「スターリン元帥閣下万歳！」という声があがった。はじかれたように「ソ同盟万歳！」という声もあがり、それに唱和する叫びが車内に溢れた。追いかけるように「インターナショナル」の唄声が湧きあがった。

山本は、通路の男たちをかきわけて松野の棚の前までくると、

「お元気で……」

と小声でいった。唇が心もち歪んでいる。なにかいいかけて途中でやめたようでもあり、ほほえんでいるようにも松野には見えた。